

昭和28年2月20日第三種郵便物認可 毎月1回1日発行
令和4年6月25日印刷 令和4年7月1日発行 第70巻第7号 通巻第829号

不二

一般版

7/2022



公益財団法人 日本書道教育学会

不二
一般版

2022年7月号

公益財団法人

日本書道教育学会

真草千字文（真蹟本）

（治本） 於農（チホン） 務茲稼穡（ヨノウ） 俶載南畝（ム） 我藝黍稷（シカシヨク） 稅熟貢新（シユクサイナンボ） 勸賞（ガゲインシヨク） 黜陟（ゼイシユクコウシン）
（チユツチヨク）

於農務茲稼穡俶載南畝
 於典物茲稼穡俶載南畝
 我藝黍稷稅熟貢新勸賞
 我藝黍稷稅熟貢新勸賞

（治は） 農を（のう） （もとし） 茲の稼穡に務めよ。（こ） 載を南畝に俶め、我れ黍稷を藝う。（こ） 熟せるを税とし新を貢し、勸賞し（ちゆつちやく） （黜陟す。）

税熟貢新

税熟貢新

【用具・用材】

筆 永昌五号
墨 顕微無間
紙 松雪

『真草千字文』 17ページ参照

隋 智永 真草千字文 真蹟本

第一六七句目

税熟貢新(熟を税し、新を貢す)

〔語釈〕

落合子健

税ハ斂ナリ君主ヨリ人民ニ田租ヲ賦課スルノ謂ナリ熟ハ禾穀ノ成熟ヲ謂フ貢ハ獻ナリ人民ヨリ君主ニ物ヲ捧クルノ謂ナリ新ハ初ナリ是レ人民艱難ニ耐ヘテ稼穡スルトコロノ禾穀登リ之レヲ收穫シ以テ各々其分限ニ應スル租税ヲ負擔シ且ツ先ツ新穀ヲ君主ニ獻ルコトヲ謂フ則チ國民貢税ノ義務ナリ

〔大意〕

熟は成熟して実った穀物をいい、新も同様に新たに実った穀物の意。税も貢もみづぐの意。

穀物を租税として納め、新しい穀物を貢ぐのは農民の務めである。

〔解説〕

国を治める根本は農業であることを説く段。この少し前から禾部の字が続く。草書の禾偏は、「和」の草書から「わ」が成ったことを想起すれば分かり易い。「ノ・タテ・ヨコ・左払・右払」の順となる。

〔書き方〕

税：偏の「禾」は草書法の縦画先行で書く。草書らしくスマートになる。傍の脚部は、「ㄣ」に「ㄣ」を書くように理解す。

熟：①②③④のように書き進める。まず空書をして筆路を掴み、使転の妙を表わすべく俯仰法を用いて運腕自在に書く。

貢：「工」を「ㄣ」のように略し「貝」の草書の「ㄣ」を書く。

新：偏は点・ヨコ・木の順で縦画尊重。旁は「ㄣ」を書くように。転折部は腋を開き、鋒を押さえつけないようにしたい。

※草書の筆順の縦画先行の法を「税」「新」で体得しよう。

(習い方は25ページ)

石橋鯉城臨

税 貢
新 熟

税 熟 貢 新

【用具・用材】

筆 蘭 蕊 羊 毫
墨 顯 微 無 間
紙 松 雪

『真草千字文』 17ページ参照

隋 智永 真草千字文 真蹟本
第一六七句目

税熟貢新（熟を税し、新を貢す）

〈習い方〉

○姿勢、坐法、執筆を工夫。両足の位置（両足を揃えずに右足を微妙に前に置く）を確認しながら学ぶ。

○用具を選び、磨墨の適切を図り、効果的な表現を心掛けよう。

○形態も大事だが、筆遣いを学んで線を作りたい。

税…禾偏（のぎへん）と「兑」の組合せ。筆写体では旁の「口」が「ム」となり「允」となる。写経での書き方によくこの例を見る。

熟…享、丸、ハ（れつか・れんが）の組合せ。享の口を梯子のように書く筆写体。「れつか」は1、2、2、3のリズムで書く。

貢…三画目の横画を暢びやかに（長大画）「力」を入れずに筆の重さを利して書く。貝の3、4、5画は続けてリズムよく軽く書く。

新…斤（おのづくり）を下げて暢びやかに。「斤」の最終画にも用筆、運筆共に起筆、送筆、収筆の三過折がある。

（習い方は25ページ）

漢字半紙（6級～10級）

「言辭安定」の四字の倣書。「言辭」または「安定」の二字を書いたの提出も可。

石橋鯉城書

言辭安定

『真草千字文』 17ページ参照

千字文 第七二句目

言辭安定（言辭は安定なり）

〈大意〉

禮記・曲禮上に「母^{なカレ}不^{ルコト}敬^セ。儼^{げん}若^な思^フ。安^{ヤス}定^セ辭^ヲ。」（敬せざること母なれ。儼として思ふが若く、辭を安定せよ）とある。立ち居ふるまいは物を考えているようにおごそかにし、言葉は落ち着いてはつきりとさせる。

〈解説〉

千字文第七二句。前句の「容止若思」に続く。字形だけに捉われず、運筆の呼吸、太細の変化、筆勢に留意して表現したい。

〈書き方〉

言…点を中心として、左側を広く象る。横画は等間隔に。

辭…辭は常用体。辭は本字。偏と旁からなる漢字は譲り合って書く（相譲相避）。

安…筆写体の形で筆順が変わる。早書きすると「あ」になり、「あ」の原字。常用体よりも結体が引き締まる。「女」の中の分間をクッキリと。定…ウ冠と疋の組合せ。点と縦画を揃え、左右の払いを暢びやかに。

【用具・用材】

筆Ⅱ永昌五号

墨Ⅱ和墨

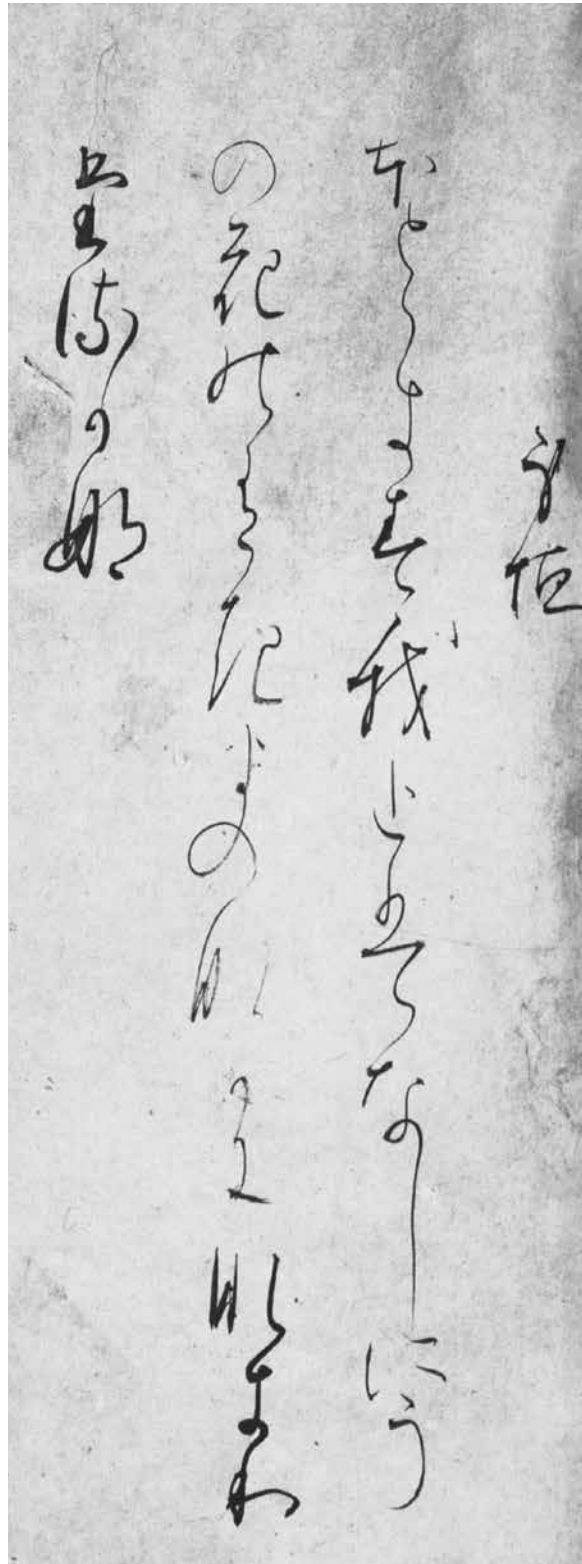
紙Ⅱ漢字用半紙

（習い方は26ページ）

かな半紙 専門部(五段〜準初段)

左の『関戸本古今集』より「身恒」から「那支わ堂流可那」までの四行を、半紙を縦に使用して臨書しなさい。

※原寸には拘らなくてよい。



(原寸)

身恒 ほとゝぎす我とはなしに卯の花の憂き世の中になきわたるかな

『関戸本古今和歌集』

17ページ参照

〈読み〉

身恒

本とゝ支春我と盤なしに

うの花能有起よの那可尔

那支わ堂流可那

〈大意〉

ほとゝぎすが鳴くのは、

自己を失い茫然とした状態で、

浮世の空を泣きながら飛んで

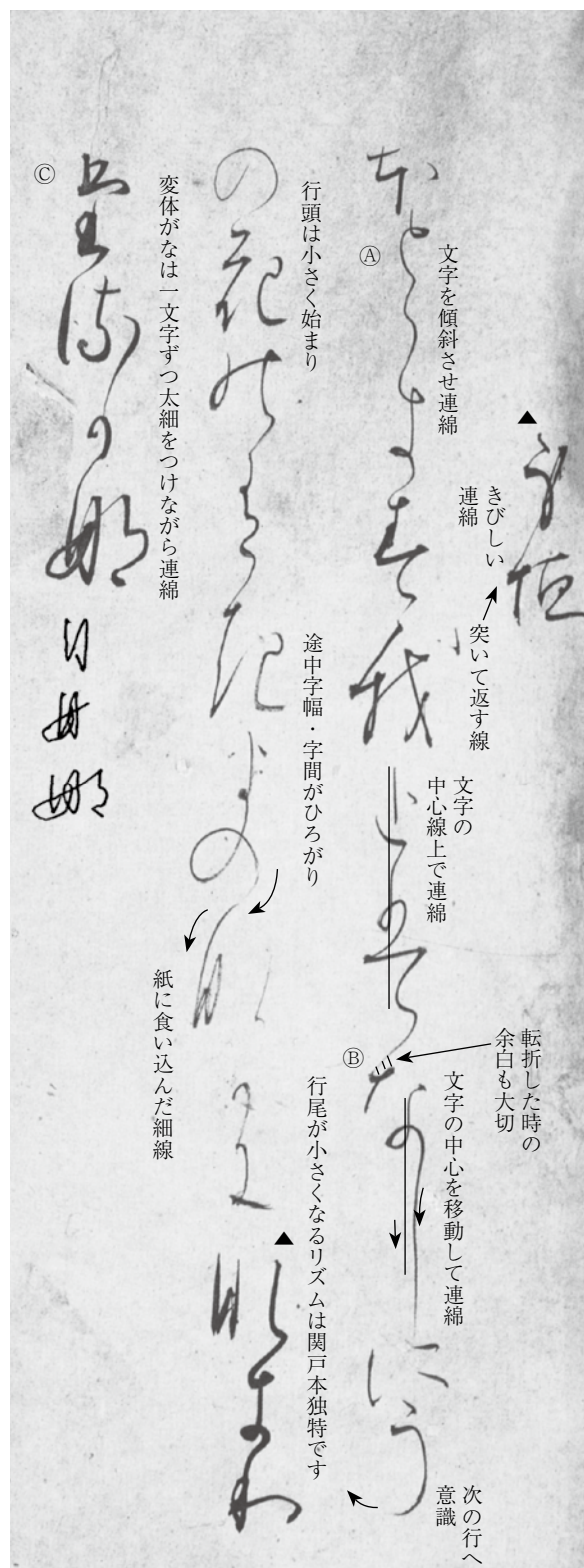
行くのだなあ。

※古今和歌集

卷第三 夏歌 164では

「郭公我とはなしに卯の花の憂き世の中になきわたるらむ」とある。

課題解説（かな半紙五段〜準初段）



〈解説〉

今月も関戸本の臨書です。

まず鋭く紙に食い込んだ線、ゆるぎない連綿や深みのある線等に気付きます。多彩な線を表現する為、今迄使用していた鋒先の面と異なる面を使う様々な場面があります。

①：筆の上下動でまとめあげた鋒先の弾力を生かしながら筆を裏返して静かに連綿します。

②：転折の際、横画にグイッと筆圧をかけ「行」にアクセントをつけています。

③：四行目、ゆつくりとした縦流れの変体は、太細を巧みに織りまぜて丁寧な面を返しています。

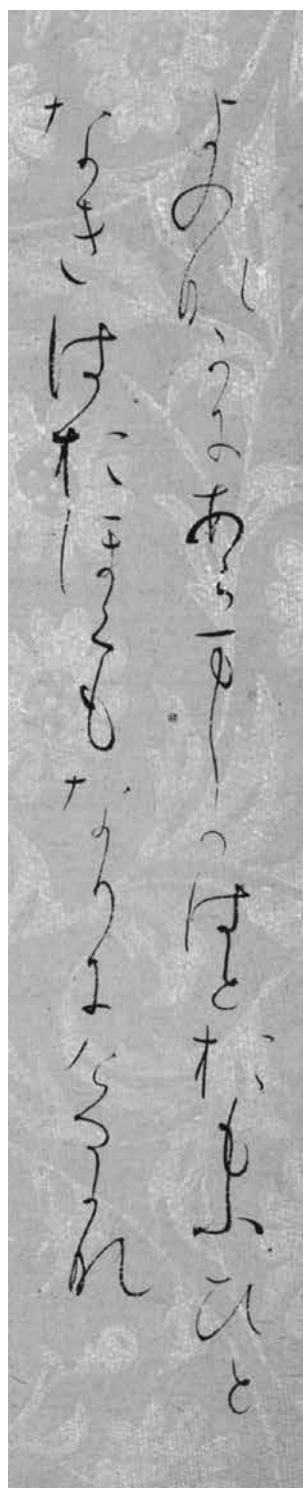
（八尋光華）

【用具・用材】

筆Ⅱ かな用小筆
墨Ⅱ かな用和墨
紙Ⅱ かな用雁皮

かな半紙（1級〜5級）

左の図版の「よの那可尔」から「なり尔介る可那」までを半紙を縦に使用して体裁よく書きなさい。



（原寸）

世の中にあらましかばと思ふ人なきは多くもなりにけるかな

『粘葉本和漢朗詠集』

17ページ参照

〈読み〉

よの那可^{なかに}尔あら万^まし可^かはと
於^おもふひとなきは於^おほくも
なり尔^{にけ}介^{かな}る可^か那

〈大意〉

この世に今も生きていては
しかつたと思う人で、すでに
故人となつてしまった人が多
くなつてきたことだなあ。

（粘葉本和漢朗詠集

巻下 懷旧 749 藤原為頼）

※拾遺和歌集

卷第二十 哀傷 1299では

「世中^{よのなか}にあらましかばと思^{おもふ}
人^{ひと}なきが^{おほ}多くも成にける哉」
とある。

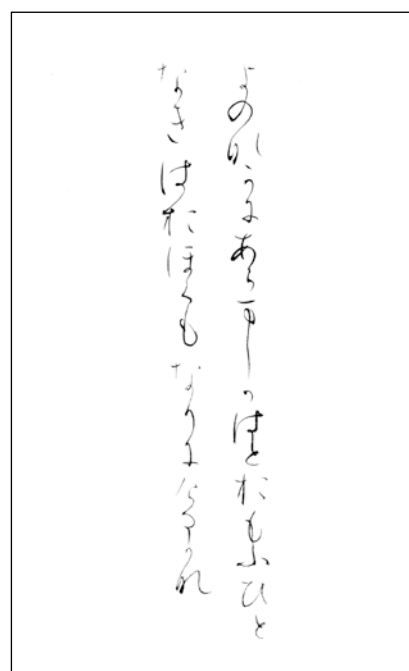
課題解説（かな半紙1級～5級）

〈解説〉

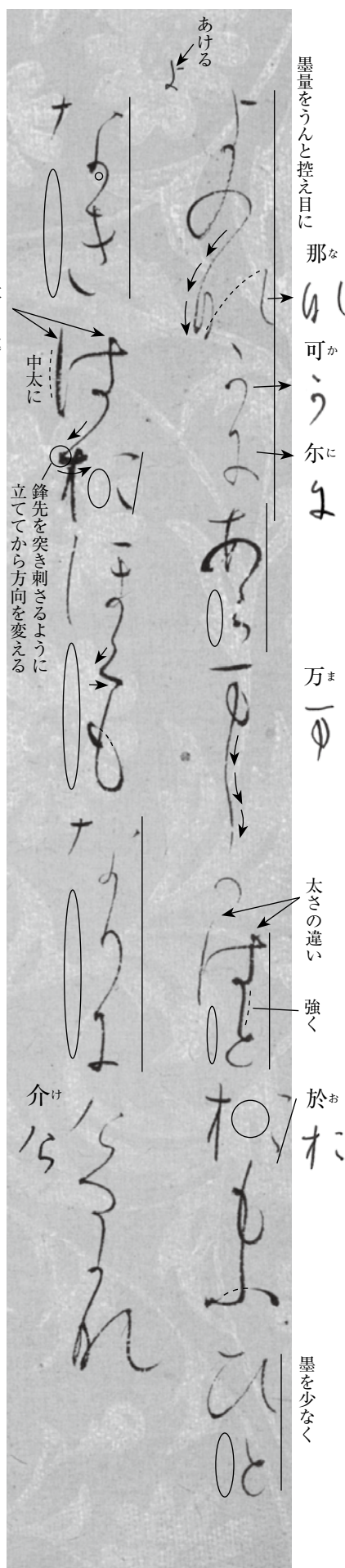
今月も和歌一首を二行書きにします。

始めの「よの那可尔」は特に墨量控え目です。筆に墨を含ませたら、硯の縁で一寸絞るようにするか、反古紙などにこすって余分な墨をよくおとし、墨量を整えてから書き始めて下さい。あつという間にスラスラと書いて出来たような気持ちになるかもしれませんが、百回、二百回と書くにつれて、この線がどうしても出来ないとか、平板で立体感がないとか、気づくことが多くなってきます。線質の豊かな変化が出るまで書き込んで下さい。（甲谷景子）

〈参考作品〉



（甲谷景子臨）



ポイント

○紙を刻むような凜とした張りのある線で書きましょう。（細くてもしつかりした強い線で）

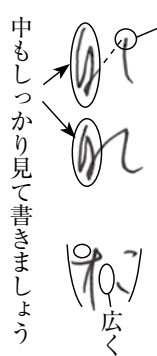
〈連綿線の悪い例〉



○方向が変わる時は必ず筆を立てます。それから次へ向かう準備を整えてから方向転換して下さい。

○「那」と「於」の書き方をしつかりおさえましょう。

突き入れる

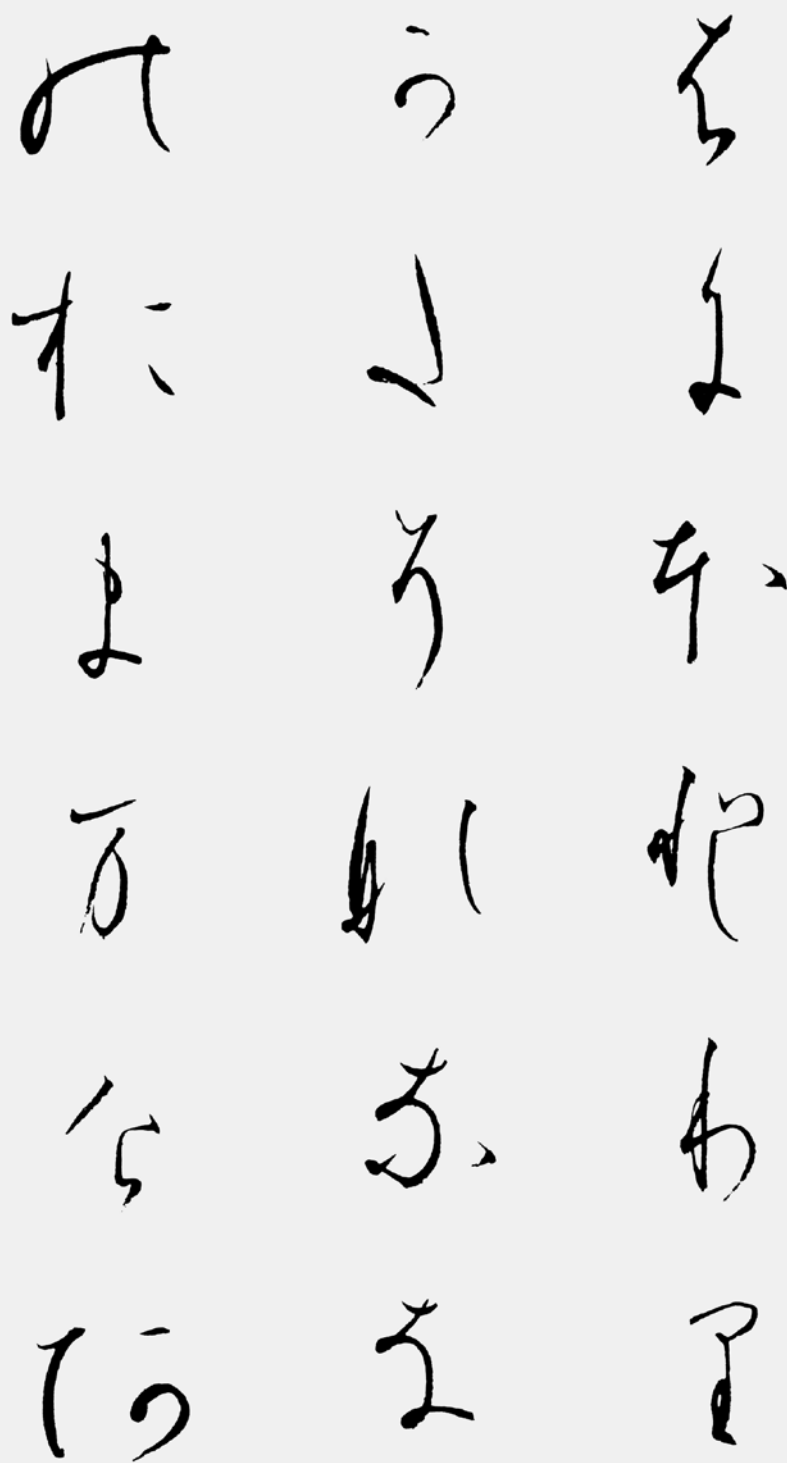


【用具・用材】

筆Ⅱ かな用小筆
墨Ⅱ かな用和墨
紙Ⅱ かな用雁皮

かな半紙(6級〜10級)

左の図版の変体がなを半紙を縦に使用して体裁よく書きなさい。



者_は
尔_に
本_ほ
登_と
利_り
里_り
可_か
多_た
曾_そ
那_な
奈_な
奈_な
能_の
於_お
末_ま
万_ま
介_け
阿_あ

〈出典〉

安東聖空「梅雪かな帖(上)」より

今月から変体がなの練習になります。まず変体がなとは何かを説明しましょう。

古来、日本には独自の文字がなく、中国発生の漢字の使用が進むと、その音のみを借りて大和ことばを表わしました。例えば「ケ」の音の表現には「計・介・遣・希」など複数の漢字が用いられました。それらは次第に簡略化・草書化されて「かな」になります。「ケ」のかなは「け・々・ぎ・き」など。

「二音の表現に複数のかながある」状態が千年程続いていましたが、明治三十三(一九〇〇)年に学校教育で学ぶかなが、一音一字に定められました。これが「ひらがな」で、「ひらがな」以外の、従来使われてきたかなを「変体かな」と呼びます。「ケ」のひらがなは「け」一字で、「々・ぎ・き」などは変体かなです。

現在では殆ど見掛けない変体かなですが、その長い歴史を考えると、かなの学習に欠かせないことが理解できると思います。

(川島史子)

【用具・用材】

筆 Ⅱ かな細字用筆

墨 Ⅱ かな用和墨

紙 Ⅱ かな用半紙

(習い方は26ページ)

永井香樹書

人間は 努力するが
迷うものだ
ゲーテのことば

人間は 努力するが
迷うものだ
ゲーテのことば

〈出典〉

「この言葉！

生き方を考える50話」

〈作者〉

ゲーテ（一七四九〜一八三二）

〈解説〉

○文字数が少なく、漢字も少ないので、五号羊毛で書きました。

○平仮名は、単調にならないように字形の広狭・線の太細に変化をもたせ、一文節「かぎり」を二行にして添わせました。

○片仮名は、墨つぎをしないで、すっきりと書き、違和感がないように留意しましょう。

○各行とも左に流れないようにしてまとめましょう。右流れも、不自然にならないように考慮しましょう。

【用具・用材】

筆Ⅱ和筆 五号羊毛

墨Ⅱ和墨

紙Ⅱ漢字用手漉半紙

（習い方は26ページ）

新和様半紙（1級〜10級）

参考手本 ※半紙を縦にして使用

石橋鯉城書

そのあたり
片づけて吊る
蚊帳哉

そのあたり
片づけて吊る
蚊帳哉

〈出典〉

「荷風俳句集」

〈作者〉

永井荷風（一八七九〜一九五九）

〈大意〉

蒸し暑い夏の夜、窓を開け放して休みたい。寢床の回りには読みかけの本などが散らばっていて、片付けながら蚊帳を吊っている。

〈解説〉

○墨は濃い目に、鋒先で紙面を突くようにして書き、渴筆を用いて明るく明快に表現したい。

○一字一の書きぶりは

〈そのあたり〉

「そ」「の」

「す」「の」「く」「い」

〈片〉

「片」「て」

〈けて〉

「け」「て」

の如く分けて書くと書き易い。
手書き文字の味わい個性はこ
うした処に出ずる。

【用具・用材】

筆Ⅱ羊毫中楷

墨Ⅱ文鳳閣墨

紙Ⅱ松雪

（習い方は26ページ）



(解説は27ページ)

林田香濤書

山下夕陽芳草路／橋邊流水落花村

〈読み〉 山下の夕陽芳草の路、橋邊の流水落花の村。

〈作者〉 王越（明代詩人）

〈大意〉 山のふもとに芳草の生える道に夕陽が射し、川の橋を渡ると落花の村に通じる。



小久保嶺石書

空憶武昌城

〈読み〉 空しく憶ふ武昌城。

〈作者〉 李白（七〇一～七六二）「儲邕の武昌に之くを送る」

〈大意〉 むなしく武昌の町を追憶している。

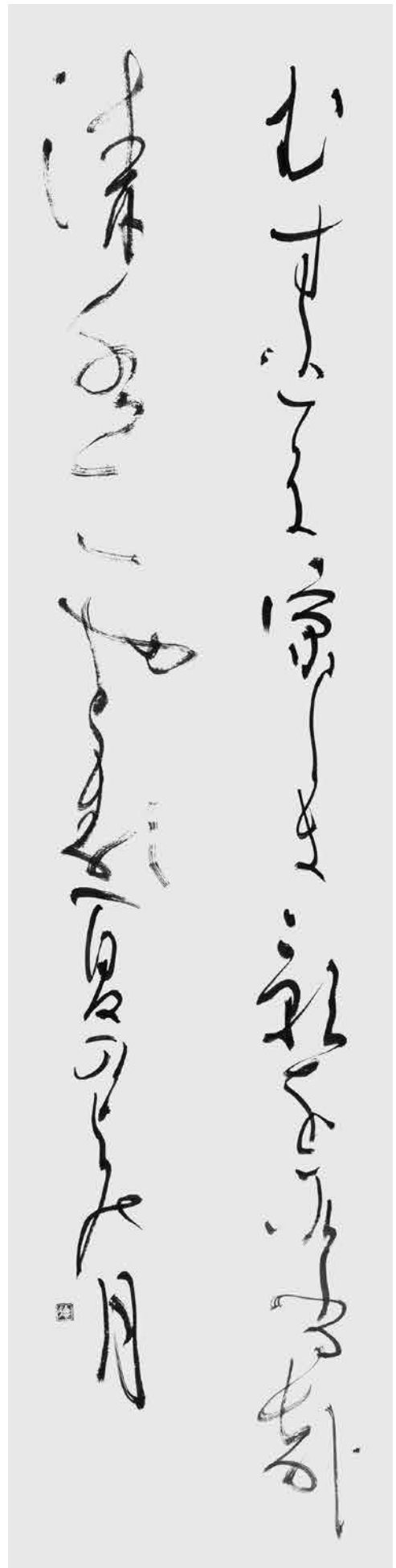
(解説は27ページ)

かな条幅 専門部（五段〜準初段）

参考手本

※変体がなの使用、漢字・かなの書き換え自由

（用紙 かな用画仙紙半折・たて 136 cm × よこ 35 cm）



（解説は27ページ）

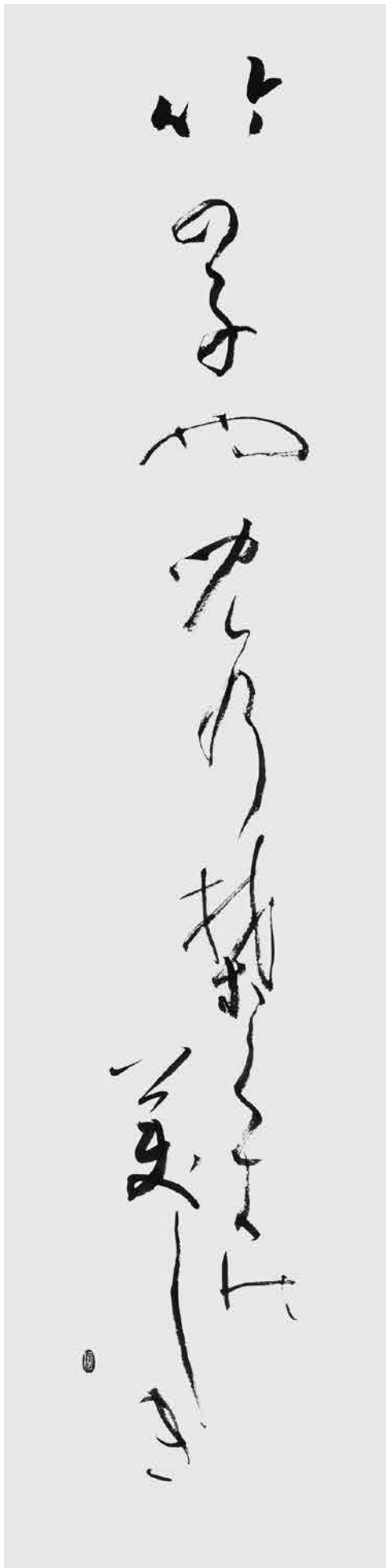
中村清徳書

かな条幅（1級〜10級）

参考手本

※変体がなの使用、漢字・かなの書き換え自由

（用紙 かな用画仙紙半折・たて 136 cm × よこ 35 cm）



内堀信嶺書

竹の子や児の歯ぐきの美しき

〔読み〕 竹の子や児乃葉久支能

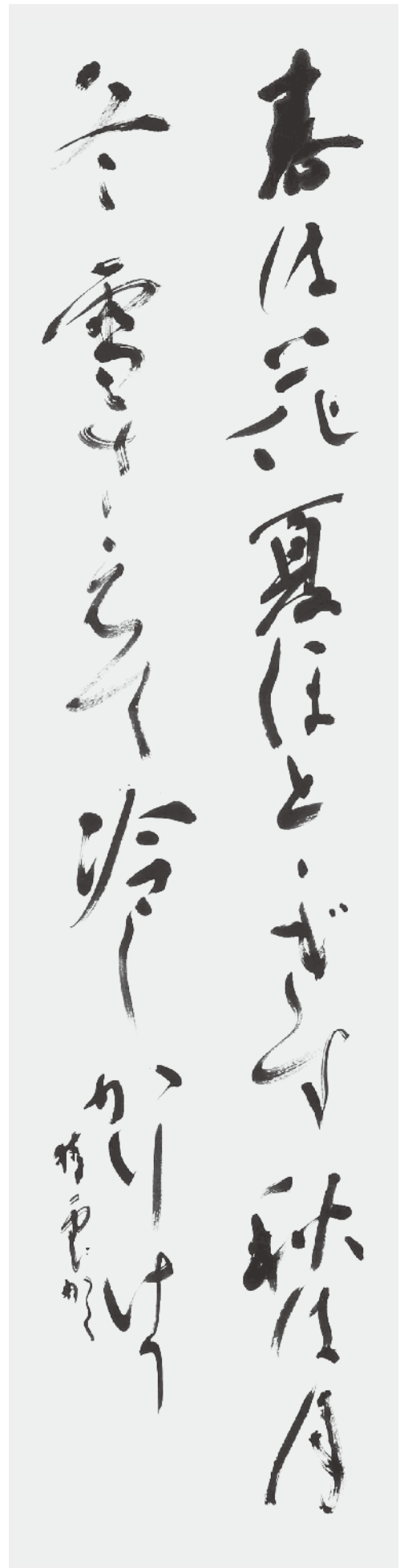
美しき

〔作者〕 服部嵐雪（二六五四〜一七〇七）

〔出典〕 炭俵

〔大意〕 幼い子供が竹の子を囁んでいる。その歯茎がなんとも美しいことだ。

（解説は27ページ）

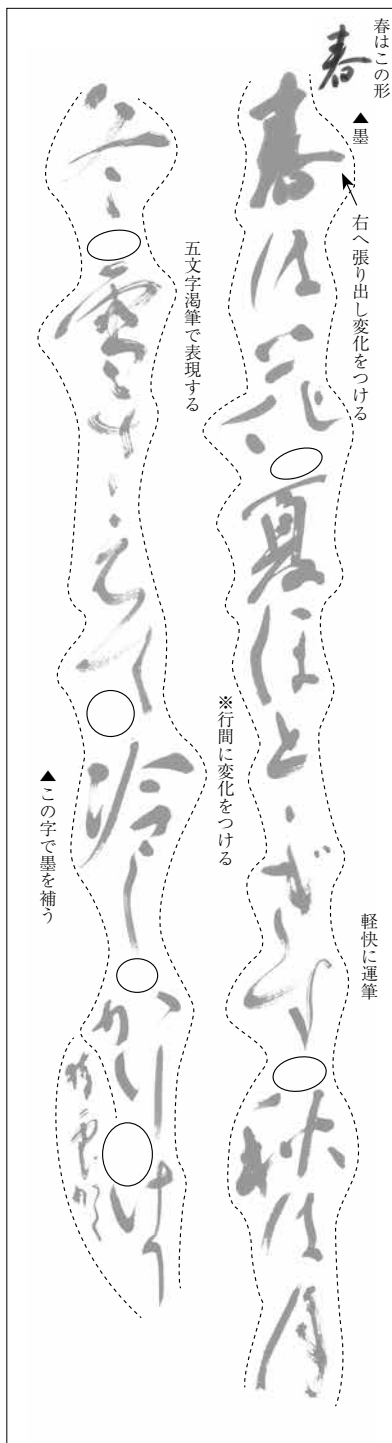


岡 晴雲 書

春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえて冷^すしかりけり

〔作者〕道元（一一〇〇〜一二五三）

〔大意〕四季のめぐり（春には花、夏にはほととぎす、秋には月、冬には雪）は外側に現れる姿で、それらをそのままに爽やか（すずし）に感じられるのは、見る人の心が爽やかということであろう。



〔解説〕

○右行：「春」は墨量を多めに軽く書き出し、「は花」は字中に空間をつくり明るく表現する。「夏」以下の六文字は軽快にリズムよく、からつと表現する。「秋は」の二文字を接近させ、その下で空間をとり、「月」は下部を広げて安定させる。

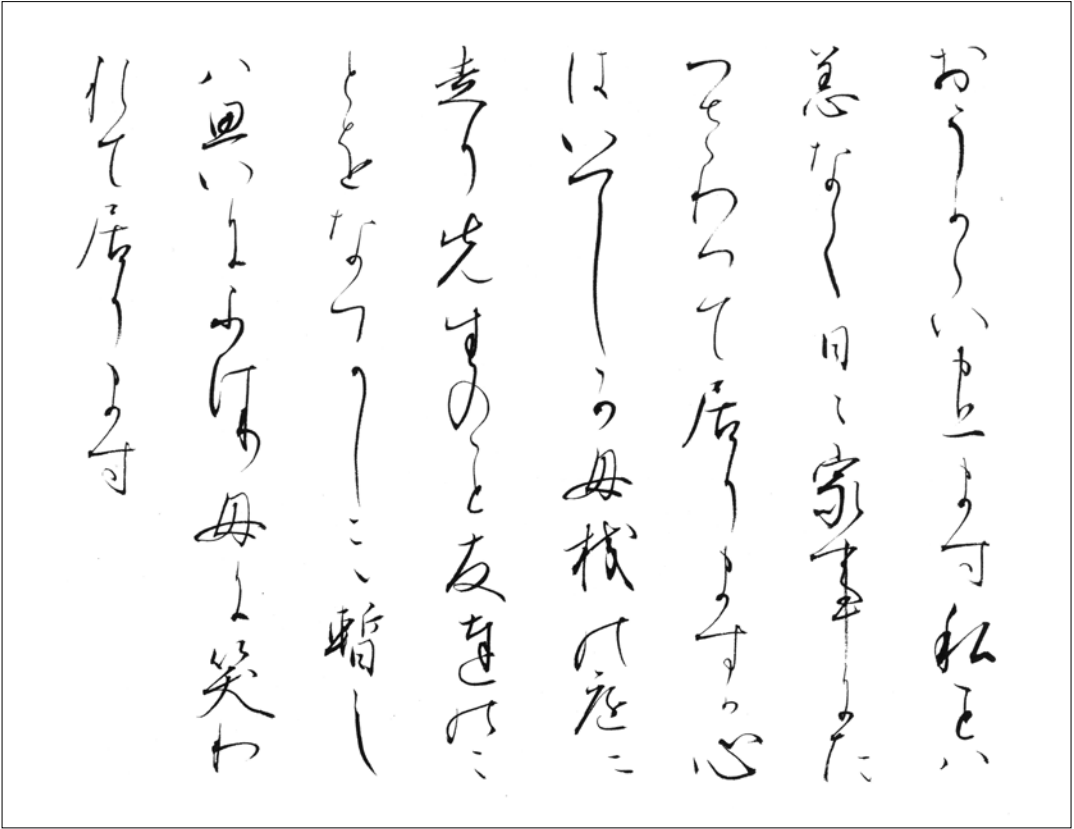
○左行：「冬」は字中に空間をとり、明るく大きく見せる。「雪」は右行二文字の間に収め、五文字を渴筆で表現する。「冷」で軽く墨を補い、やや右移動させ軽快に運筆し収束させる。

【用具・用材】

筆Ⅱ羊毫長鋒筆 墨Ⅱ油煙墨
紙Ⅱ紅星牌単宣

実用書（随意課題）

梅雪手紙帖より（安東聖空）



・月別出品券（65 ページ）とバーコード出品券（段級欄に「実用」と記入）を左下に貼付してください。

参考の小筆
・玉梓
・選毫圓健

切りとって提出してください（コピーも可）

教室名	
氏名	

月別出品券を貼る

書 蹟 解 説

『真草千字文』 P.2

漢字半紙（五段〜準初段・1級〜5級）

梁の周興嗣がつくった千字文を真書（楷書）と草書の二体に書写したもので、毎行十字よりなり、標題二行と本文二百行、計二百二行ある。

筆者は隋の僧侶・智永（生没年不詳）。書聖・王羲之の七代の孫といわれる。智永は楷行草いずれの書体も能くし、彼の書への熱意は大変なもので、永欣寺に三十年間閉じこもって千字文を書き続け、使い古しの筆が大きな籠五杯分にもなった、などの伝説が伝わるほどの名品である。特に千字文をよく筆写し、遣隋使によって日本にも請求しているという。

『関戸本古今和歌集』 P.6

かな半紙（五段〜準初段）

古今和歌集の写本で、加賀前田家旧蔵、のちに名古屋の関戸家に伝わったことから、この名称がある。緑・茶・紫などの鳥の子の染紙を糸綴じの冊子としたもので、もとは上下二冊であったとされている。十一世紀後半ころの書写と考えられ、伝藤原行成筆とされ、その書風は流麗で筆遣いに俯仰法が見られ、自然な筆致で潤渇の変化も美しい。なお、関戸家には巻一から巻二十まで四十八枚が、とびとびながら遺っている貴重な写本の一つである。

『粘葉本和漢朗詠集』 P.8

かな半紙（1級〜5級）

藤原公任（九六六〜一〇四一）の手になる朗詠用の歌集。四季別、主題別に漢詩と和歌を交互に記す珍しいスタイルの歌集である。

粘葉本はその写本の一つで、ページ同士を糊で次々と貼りつけて本にする「粘葉装」で装丁されていることからその名がある。現在は宮内庁三の丸尚蔵館に所蔵されている。書写者は平安時代の名書家、小野道風・藤原佐理と並び「三蹟」として著名な藤原行成（九七二〜一〇二八）と伝えられている。

名筆家として讃えられた人物の筆と伝えられた本書は、その形の美しさや流れるような巧みな構成から、高野切と並びかな臨書に広く使われている。

岡山高蔭（二八六六〜一九四五） P.19

かな半紙（会友〜準八段）

書家、歌人。号は話雲。尾張の人で、良家の子女に書道を指導し、藤岡保子、熊谷恒子、森田竹華らを輩出した。

書を巖谷一六に学び、同時に和歌を小出繁に学び、御歌所にも奉仕、「高蔭百首」、「高蔭千首」を著した。また晋唐の書に和様の筆意を加え、独自の雄渾な仮名文字を書いた。

課題（P19）は、徒然草第十九段。複数巻ある折帖のうちの第五巻。1ページに1行認められており、1ページは縦二八・二cm、横八・〇cm。

◆次号8月号課題予告

かな半紙

五段〜準初段…や有可の日よめる 尔ふの堂、み年 今日よ利はい末こむと志のきの布をそいつしかとのみ末ちわ多類倍起

（関戸本古今集）

《古今和歌集 巻第四 秋歌上 183》

1級〜5級…わ可支みはちよ尔やちよにさ、れいし能い者ほとなりてこ介のむ寸末て

（粘葉本和漢朗詠集）

《古今和歌集 巻第七 賀歌 343》

6級〜10級…佐支遊三志毛 耳遍越王堂連所徒免美世須

《梅雪かな帖 上》

新和様半紙

五段〜準初段…未定

1級〜10級…路地の蚊に馴れて裸の涼かな

（永井荷風）

漢字条幅

五段〜準初段…未定

かな条幅

1級〜10級…八月邊風高

五段〜準初段…水の音にあつさ忘るるまとあかな梢のせみの聲もまぎれて

《山家集》

1級〜10級…江のひかり柱にきたり今朝の秋

《成田蒼虬》

新和様条幅

五段〜準初段…落葉衣わびて寄りける古き椽染むや若葉の香のゆらめきて

《窪田空穂》

※課題は変更することがあります。
※会友〜準六段の課題予告は18頁をご覧ください。

今月の競書課題

専門部 会友準六段

今月の出品期間 7月4日(月)～7月13日(水)必着

漢字半紙

左の語句を、半紙を縦使用、自運縦書き。(書体自由)

文物多師古

文物多師古

〈出典〉『鳴鶴作品草稿集Ⅰ』

〈読み〉文物多く古を師とす(杜甫「行きて昭陵に次る」)

〈大意〉制度文物は古代の良法を範とすることを基本とする。

かな半紙

岡山高蔭書『つれくくさ』臨書

課題は次ページに掲載しています。

新和様半紙

左の短歌を、半紙を縦使用、自運縦書き。
(漢字・かなの書き換え自由、歴史的仮名遣いは尊重)

鎌倉や御仏なれど釈迦牟尼は美男におはす夏木立かな

〈大意〉ああ、鎌倉。ここにいらつしやるお釈迦様は御仏であるのだけれど、美男でいらつしやる。夏木立の中に。

〈作者〉与謝野晶子(一八七八～一九四二)

〈出典〉与謝野晶子歌集より「恋ごろも」(岩波文庫)

8月号課題予告				
漢字半紙	清坐契心賞	(鳴鶴作品草稿集Ⅰ)		
かな半紙	岡山高蔭書『徒連くくさ』			
新和様半紙	うす紅の棹円の貝を七つ八つてのひらに載せものを思へる(与謝野晶子)			
漢字条幅	黄麈行客汗如漿 少住農家漱井香	(鳴鶴作品草稿集Ⅱ 范成大)		
かな条幅	みそぎする河の瀬見れば唐衣日も夕暮に波ぞ立ちける(新古今和歌集284)			
新和様条幅	あの光るのは千曲川ですと指さした山高帽の野菜くさい手(北原白秋)			

※課題及び課題の文字は変更することもあります。

漢字条幅

左の語句を、画仙紙半折(136cm×35cm)を縦使用、自運縦書き。(書体自由)

日長路好城門近
借我茅亭暝一杯

日長路好城門近
借我茅亭暝一杯

〈読み〉日長く路好くして城門近し。我が茅亭を借りて一杯を暝む。

〈大意〉日長の時分、道も便利な所で町にも近い。私の茅葺きの家で一杯あたためていきなさいよ。

〈出典〉『鳴鶴作品草稿集Ⅱ 范成大 田園四時雜興』

かな条幅

左の和歌を、画仙紙半折(136cm×35cm)を縦使用、自運縦書き。(変体がなの使用、漢字・かなの書き換え自由)

夏衣片へ涼しくなりぬなり夜や更けぬらんゆきあひの空

〈大意〉わたしの夏衣は、もう片側が涼しくなったようだ。夜が更けてしまったのであろうか。夏と秋との行き合う空よ。

〈出典〉新古今和歌集 巻第三 夏歌282 前大僧正慈円

新和様条幅

左の短歌を、画仙紙半折(136cm×35cm)を縦使用、自運縦書き。(漢字・かなの書き換え自由、歴史的仮名遣いは尊重)

雲あかる山の真洞に啼くこゑは丹の頬の小雉子早や巢立つらし

〈大意〉雲が晴れ、山のほら穴の巢から頬の赤い子どもの雉子の啼く声がしている。もう巢立ちの頃らしい。

〈作者〉北原白秋(一八八五～一九四二)

〈出典〉北原白秋歌集より「海阪」(岩波文庫)

自運Ⅱ与えられた課題語句を自運作品として用紙と筆を選び墨の磨り工合を工夫し、書作品として造型すること。それ故、先生に手本を書いてもらうことは避けた。作品制作に当っては、古典からの集字などを試みて始めるのもよい。参考図書としては、現代字体字典(講談社)、五體字類(西東書房)、大字典(講談社)、古典かな字鑑(書藝文化新社)、広辞苑(岩波書店)、古語辞典(旺文社)などを見たい。

如是於一切衆生~若自書の百九十二字を清書して出品。

如是於一切衆生亦為第一一切聲聞辟
支佛中菩薩為第一此經亦復如是於一
切諸經法中亦為第一如佛為諸法王此
經亦復如是諸經中王宿王華此經能救
一切衆生者此經能令一切衆生離諸苦
惱此經能大饒益一切衆生充滿其願如

(有能受持是經典者、亦復)

如是、於一切衆生(中)、亦為第一。一切聲聞、辟

支佛中、菩薩為第一。此經亦復如是、於一

切諸經法中、最為第一。如佛為諸法王、此

經亦復如是、諸經中王。宿王華、此經能救。

一切衆生者、此經能令、一切衆生、離諸苦

惱。此經能大饒益、一切衆生、充滿其願、如

(能くこの經典を受持すること有る者も亦復、)

かくの如し、一切衆生の中において、亦為第一なり。一切の聲聞・

辟支仏の中にて、菩薩は為れ第一なり。この經も亦復、かくの如し、

一切の諸の經法の中において、最も為れ第一なり。仏は為れ諸法の王なるが如く、

此の經も亦復、かくの如し、諸經の中の王なるなり。宿王華よ、この經は能く

一切衆生を救うものなり。この經は能く一切衆生をして、諸の苦惱を離れしむるなり。

この經は能く大いに一切衆生を饒益して、その願を充滿せしむること、

○今回の細字法華經中の「一」を抽出して、その書きぶりと用筆と運筆の違い、変化を示しておいた。同じ人が書しても種々に書かれている。此処に書き手の筆遣いの特徴が見えてくる。

○なお、この筆蹟をよくく見ると、現代の中国人にも伝わる細字の執筆法、撥鐙法なる執筆法に習熟した姿が此処にある。撥鐙法は法隆寺金堂広目天像の執筆図に見ることが出来るので参照されたい。

(2-3)	(7-6)	(5-1)	(2-8)	(1-4)
中	一	一	一	一
(3-5)	(11-9)	(5-10)	(2-16)	(1-11)
中	一	一	一	一
(4-8)	(11-12)	(6-8)	(3-9)	(1-12)
中	一	一	一	一
	(11-16)			
	一			

清涼池、能滿一切、諸渴乏者、如寒者得火、
如裸者得衣、如商人得主、如子得母、如渡
得船、如病得醫、如暗得燈、如貧得寶、如民
得王、如賈客得海、如炬除暗、此法華經、亦
復如是、能令衆生、離一切苦、一切病痛、(能解)一
切、生死之縛。若人得聞、此法華經、若自書、
(若教人書、)

清涼の池の能く一切の諸の渴乏せる者を満すが如く、寒き者の火を得たるが如く、
裸なる者の衣を得たるが如く、商人の主を得たるが如く、子の母を得たるが如く、
渡りに船を得たるが如く、病に医を得たるが如く、暗に燈を得たるが如く、
貧しきに宝を得たるが如く、民の王を得たるが如く、賈客の海を得たるが如く、
炬の暗を除くが如く、この法華經も亦復、かくの如し、能く衆生をして一切の苦、
一切の病痛を離れ、能く一切の生死の縛を解かしむるなり。
若し人、この法華經を聞くことを得て、若しくは自らも書き、
(若しくは人をして書かしめば、)

清涼地能滿一切諸渴乏者如寒者得火
如裸者得衣如商人得主如子得母如渡
得船如病得醫如暗得燈如貧得寶如民
得王如賈客得海如炬除暗此法華經亦
復如是能令衆生離一切苦一切病痛一
切生死之縛若人得聞此法華經若自書

・二画の字として「人」の二字。

(8-8) 人 (12-7) 人

・三画の字として「子」の一字。

(8-12) 子

・四画の字として「王」を採り上げている。

(4-9) 王 (4-11) 王

・清涼池：地と書かれて
いるが「池」と書かれる
べき処。

(7-1) 清

(7-3) 地

下の「般若心経」か、前頁「法華経」(見開き12行)一巻のどちらかを出品してください。

不二細字研究室 (会友～1級)

石橋厚水先生書

摩訶般若波羅蜜多心経	觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五	蘊皆空度一切苦厄舍利子也不異空空不	異色色即是空空即是色受想行識亦復如	是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨	不增不減是故空中无色无受想行識无眼	耳鼻舌身意无色聲香味觸法无眼界乃至	无意識界无无明亦无无明盡乃至无老死	亦无老死盡无苦集滅道无智亦无得以无	所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心无	罣礙无罣礙故无有恐怖遠離一切顛倒夢	想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故	得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜	多是大神咒是大明咒是无上咒是无等等	咒能除一切苦真實不虚故說般若波羅蜜	多咒即說咒曰	揭諦揭諦波羅揭諦波羅揭諦菩提薩婆訶	般若心経	奉為二百萬卷寫経發願成就	為 (以願しんをさ書へんため) 果体例 ● 梵字安全 ● 字体健全 ● 半葉成就 字	住所	齋戒沐浴 氏名 謹寫
------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	--------	-------------------	------	--------------	--	----	---------------

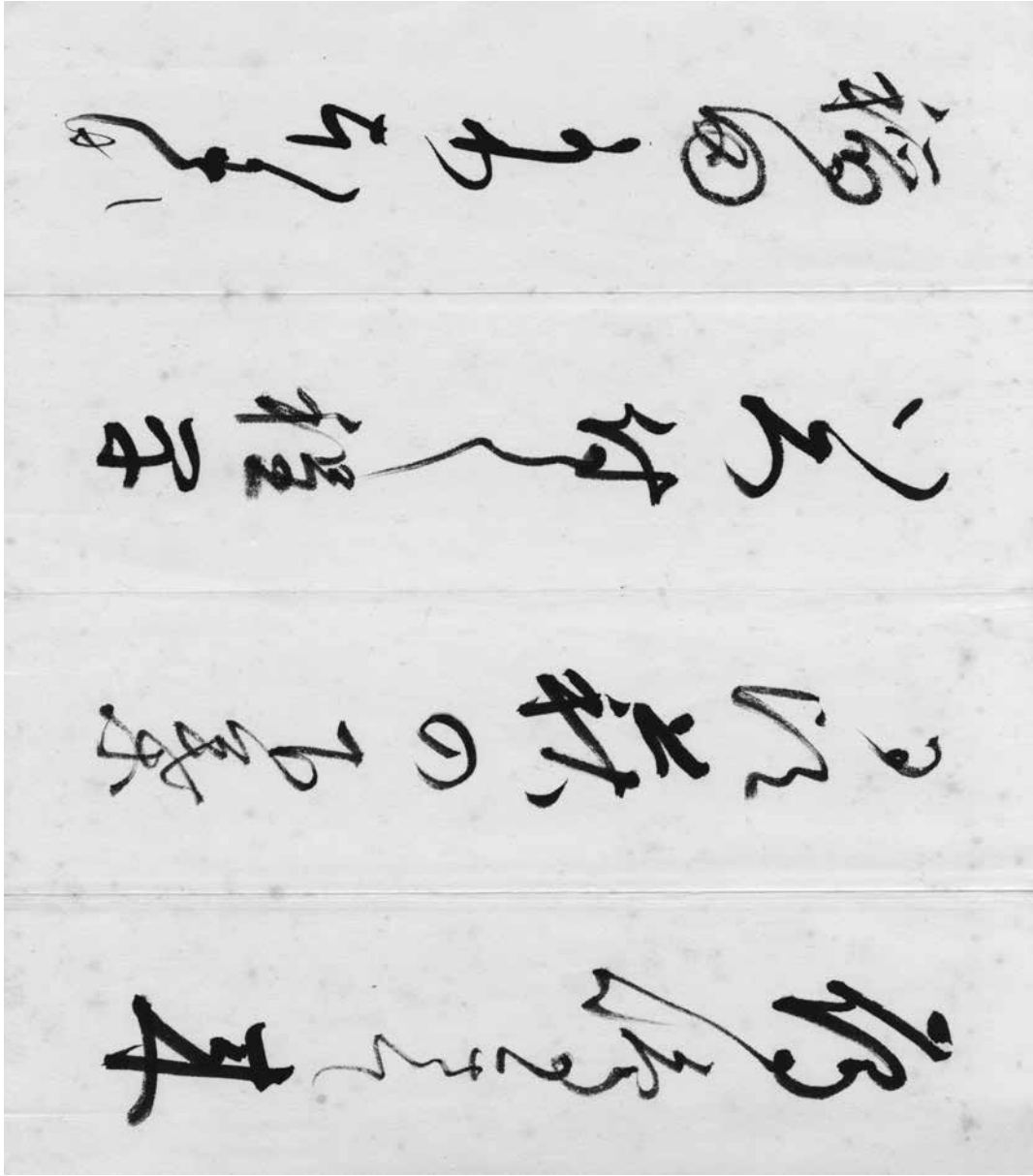
※納経料を添えてご出品下さい

左の「雁鳴きて」から「早稲田可利本春那」迄四行を半紙を横に使用して臨書しなさい。

※徒然草第十九段から

七夕まつることなまめかしけれ。やうく夜寒になるほど、雁鳴きてくること、萩の下葉色つくほど、早稲田刈り干すなど、とりあつめたる事は秋のみぞ多かる。

（大正時代の文部省中等教員資格認定試験委員 岡山高陰書による『つれくさ』折帖手本の二部）



縦二八cm 横三三cm (原寸に近い大きさで書くこと)

○一級以上の方はこうした課題を見て、釈文などで親しめるようにしておきたい。また、その為に背臨を試みて覚え込んで欲しい。

月別出品券と
バーコード出品券の貼り方

教室名 氏名	④
⑤月別出品券	③
⑥バーコード出品券	

不二篆刻研究室

▼規定…左の語句を刻しなさい。(朱白自由・大きさは4センチ角以内)

貴徳

〈読み〉キトク
〈大意〉徳を貴ぶこと。

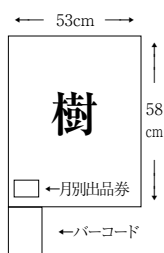
▼随意…好きな語句を刻しなさい。(朱白自由・大きさは4センチ角以内)

○作品は「半紙横 $\frac{1}{2}$ 」を縦長にして体裁よく押印し、印影を提出。

○巻末の出品要項をよく読んでご出品ください。

一字書

▼規定…左に示す漢字を一筆書として墨継ぎすることなく「書」しなさい。
(書体自由)



〈読み〉「音」ジュ 「訓」き・うえる・たてる
〈意味〉立ち木。木をうえる。うち立てる。

〈おすすめの利用紙〉

萬象 50枚 (夾宣)

作品の左下に教室名・氏名・会員番号・段級を鉛筆で記入のこと。

▼随意…左に示す平がなに運筆の呼吸を吹き込んで生命ある字に仕立てなさい。
(書体自由)

仮名の成り立ち。草書の「於」の書法、筆遣いも考えて創作すること。

〈おすすめの利用紙〉

一字書 100枚 (夾宣)

特選二字書 100枚 (夾宣)

作品の左下に教室名・氏名・会員番号を鉛筆で記入のこと。



○バーコードは、段級欄に「二字書規定○段(級)または「一字書随意」と書いて貼付してください。(規定の方は段級を忘れずに)

○落款は印のみか一字に雅印ぐらいで。

○巻末の「競書出品要項」をよく読んでご出品ください。

課題解説

今月の出品期間
7月4日(月)～7月13日(水)必着

漢字半紙 1級～5級 (真草千字文)



(石橋鯉城)

漢字半紙 五段～準初段 (真草千字文)



(石橋鯉城)

かな半紙 6級～10級



(川島史子)

漢字半紙 6級～10級



(石橋鯉城)

新和様半紙 1級～10級



(石橋鯉城)

新和様半紙 五段～準初段



(永井香樹)

漢字条幅 五段〜準初段

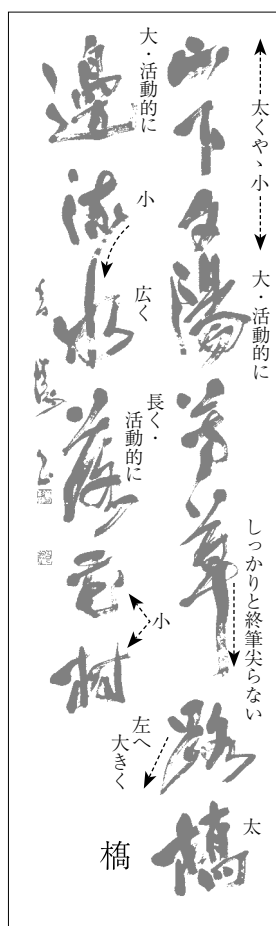
(林田香濤)

律動性の一貫を意識して、今回は細くなりすぎないよう、少し太味でリズムをとることが目標。流れを出そうとすると速く、細く運筆する傾向を多く見る。本当のリズムはそれとは異なる。

○文字の大小・長短を意識しておこう。
○流れが切れないよう、意識を連続させていこう。

〈用具・用材〉

筆Ⅱ和筆・羊毫筆 墨Ⅱ和墨・油煙墨
紙Ⅱ中国画仙紙



漢字条幅 1級〜10級

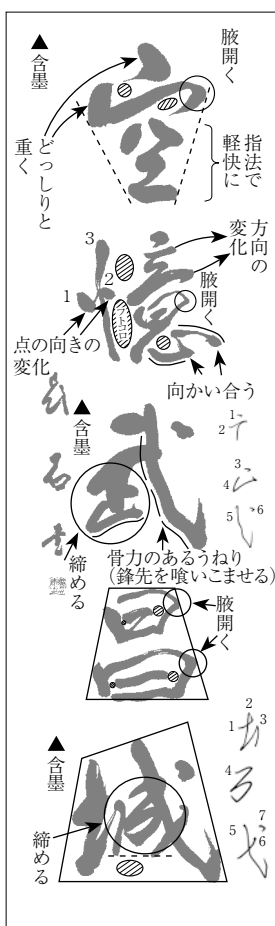
(小久保嶺石)

○半切五文字作品として適切な筆のサイズや墨量を知る。
○左右に充分に余白を設けて、本文を書いた筆で落款を入れる。
空：冠を幅広く重めにし、中は指法で軽快に。全体を逆三角形にまとめる。
憶：立心偏は点2つが先。画数が多いので、細目の線でまとめるが、鋒先を利かせて抑揚をつけたい。

め、「」は骨力ある線で暢びやかに。
昌：概形は台形にして「日」2つの構成。転折では腕を開き、日の中の横画は空間をとって明るくする。
城：「武」と同様に真中を締めて、戈法を暢びやかに収める。

〈用具・用材〉

筆Ⅱ和筆・羊毫中鋒 墨Ⅱ和墨・油煙墨
紙Ⅱ中国画仙紙



かな条幅 五段〜準初段

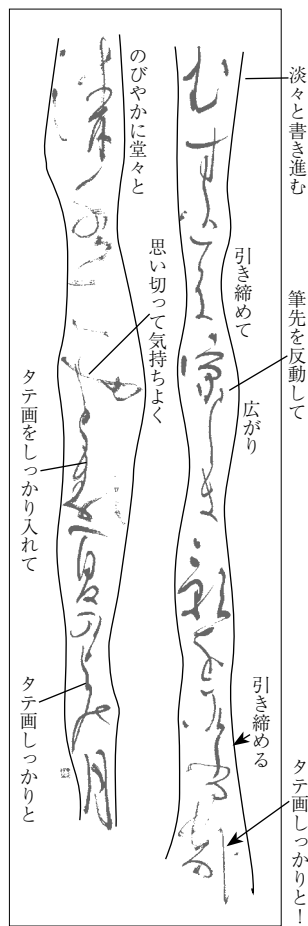
(中村清徳)

書き始め静かに、ひらがなで淡々と入墨。「涼」は行書で「し支」の縦画で行を引き締めます。「影」は行の広がりを持たせ、行尾「哉」で一行目をまとめます。二行目「清水」は行書淡墨で思い切りのびやに進めます。「やと類」は作品をまとめ

る大切な動きです。しつかり練習して書き上げて下さい。更に結句で全体をまとめましょう。

〈用具・用材〉

筆Ⅱかな条幅用筆 墨Ⅱ和墨
紙Ⅱ和画箋



かな条幅 1級〜10級

(内堀信嶺)

○句の意を想い、清楚な表現を試みました。
○字間の広狭・単体・連綿により、行の流れを変化させてみた。
○行の中間部での疎密の変化を大切にしてみました。

〈用具・用材〉

筆Ⅱ鼈毫かな条幅用筆 墨Ⅱ和墨
紙Ⅱかな用画仙紙

